１７．聖書の中の水

１．はじめに

旧約聖書の最初の５つの書を「モーゼ五書」というが、「出エジプト記」は「創世記」に次ぐ２番目の書である。ここには神ヤハヴェの啓示のもと、解放者モーゼがエジプトでの迫害に苦しんでいた100万とも200万人とも言われる数のイスラエルの民を引き連れ、不毛の地の先、“神との約束の地”、カナン（現在のパレスチナ付近）に向けて脱出する過程、苦難の旅、神との契約、十戒の授与などが語られている。

この不毛の地は地理的にみてシナイ半島とするのが妥当であるが、中には紅海の東方海岸の地域だとする説もある。モーゼがシナイ山で神から十戒を授かった際、山は燃え、鳴動したとなっているが、このような現象は火山ならつじつまが合うが、シナイ山は火山ではないからである。しかしここでは素直にシナイ半島の荒野をイスラエル人が流浪した舞台として考察を進めることにする。

写真１　ナイル川とシナイ半島

（出典：フリー百科事典「Wikipedia」）

シナイ半島の南部は標高1,000～2,500mの山岳地帯であり、北部の地中海に面した地域は砂丘地帯、さらに海岸部では海岸サブカが展開する。両地域に挟まれた中央部は不毛の礫砂漠が展開する。

２．出エジプト記の舞台－シナイ半島－

シナイ半島の面積は62,805km^{2}でエジプト総面積の6%にあたる。その南部はシナイ山(2,285m)やカテリナ山(2,637m)など、主として先カンブリア紀の結晶質岩からなる山岳地帯が半島の南縁を縁取るように連なっている。これらの地層はシナイ半島のいわば基盤とも言うべきものである。この山岳地帯の北、地中海側は古生代から古第三紀にいたる厚い海成層（ヌビア砂岩を含む）が上記の基盤を覆って堆積し、山岳地帯を涵養域とする被圧地下水の帯水層を構成している。（写真1，図１）

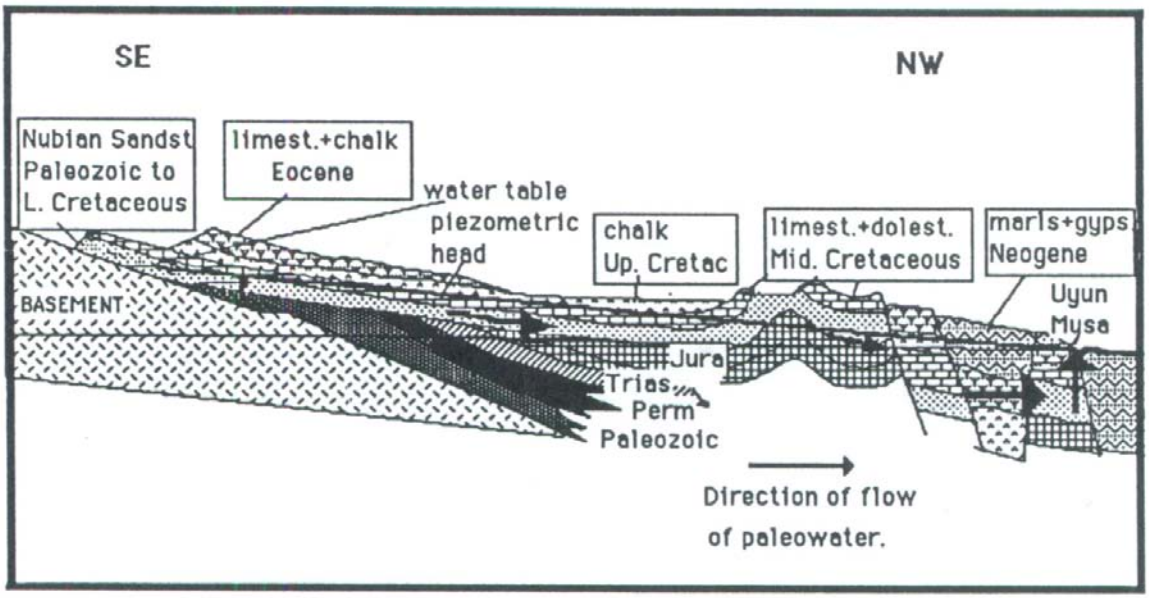

図１　シナイ半島の水文地質断面図

（出典：Water Shall Flow from the Rock, Professor Dr Arie S. Issar, 1990 ）

シナイ半島主部の地形は、北部にあって北東－南西方向に連なりまた点在する山丘群の他は極めて単調で、北に向かって高度を下げつつ展開する礫砂漠状の荒野が広がっている。

この茫漠とした大地、すなわちTieh 高原の水系のほとんどは地中海に注ぐWadi El Arish に集まり、シナイ半島の34%を占めるEl Arish valley basin をかたちつくっている。しかし年間降水量50mm に満たない量（図2）ではそのほとんどは通常は涸れ川の状態にある。その河谷底つまりワジにはその堆積物を帯水層とする浅い地下水が存在するところもあるが一箇所で多量の水を得るのは難しい。またヌビア砂岩中の被圧地下水を得るには200～700m の掘削を要するが、勿論モーゼの時代では手が届かない世界である。(El Arish valley basin 中央部のNakhl では深度875m に達する深井戸がある。因みにその塩分濃度は1,500～2,000ppm である)

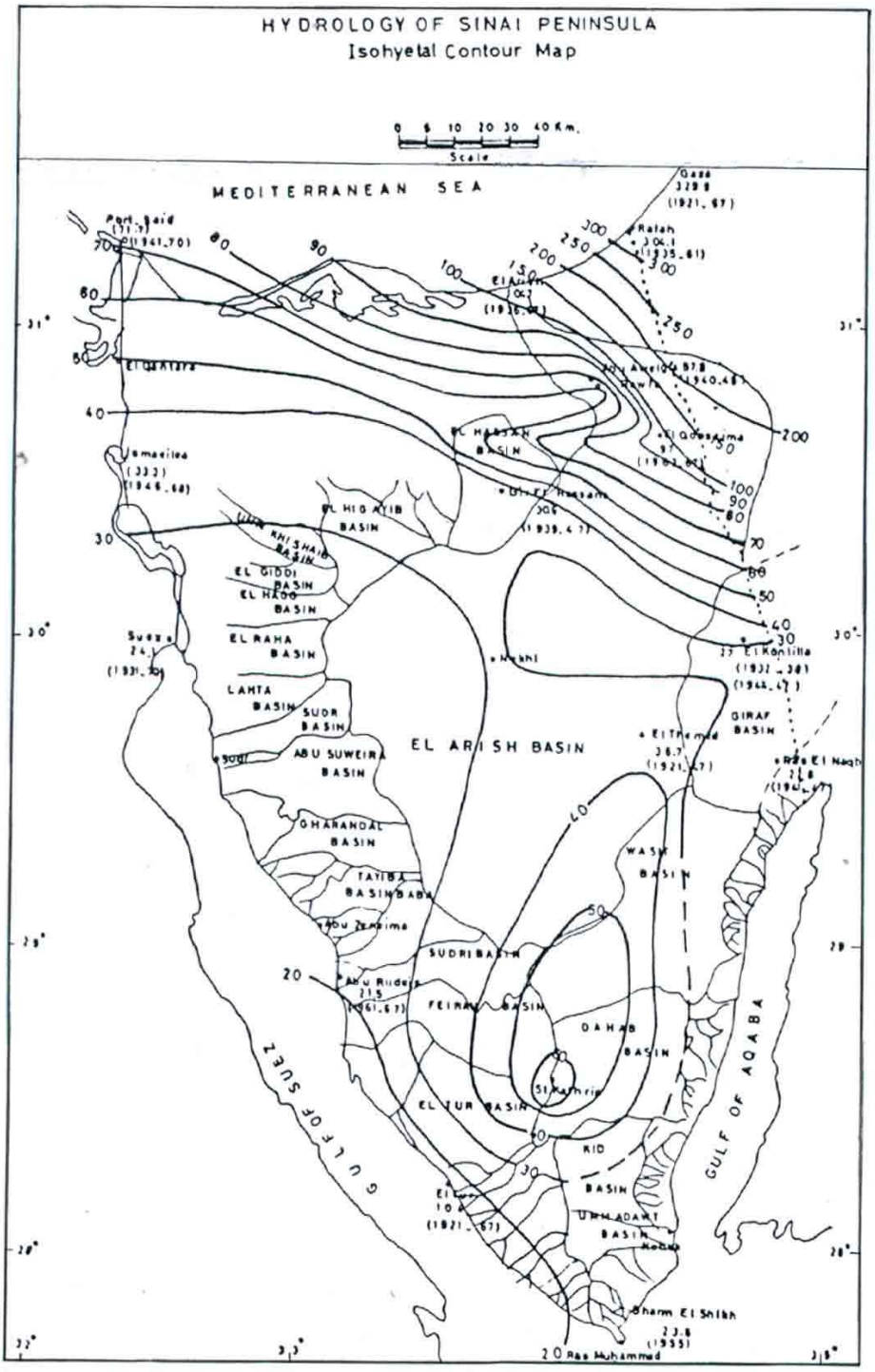

図２　シナイ半島の年間降水量

（出典：Annals of the Geological Survey of Egypt, 1979）

地中海に面した地域や、スエズ湾に面した地域は砂丘地帯になっていて、その砂丘砂を帯水層とするローカルな地下水が存在する。また砂丘の下に存在する第四紀層を帯水層とする地下水は海岸に近くになると浅いところまで上がってくるので浅井戸による取水が可能になる。処によっては地下水の露頭ともいえる湧水も存在する。これらがモーゼの時代からこの地域のオアシス集落や、エジプトと“肥沃な三日月地帯”の間を移動する人々や家畜の飲み水を支えてきたものと思われる。つまりこの地域は水が得やすいため、古代から交通の要路となっていたことが推察できる。(図 3)

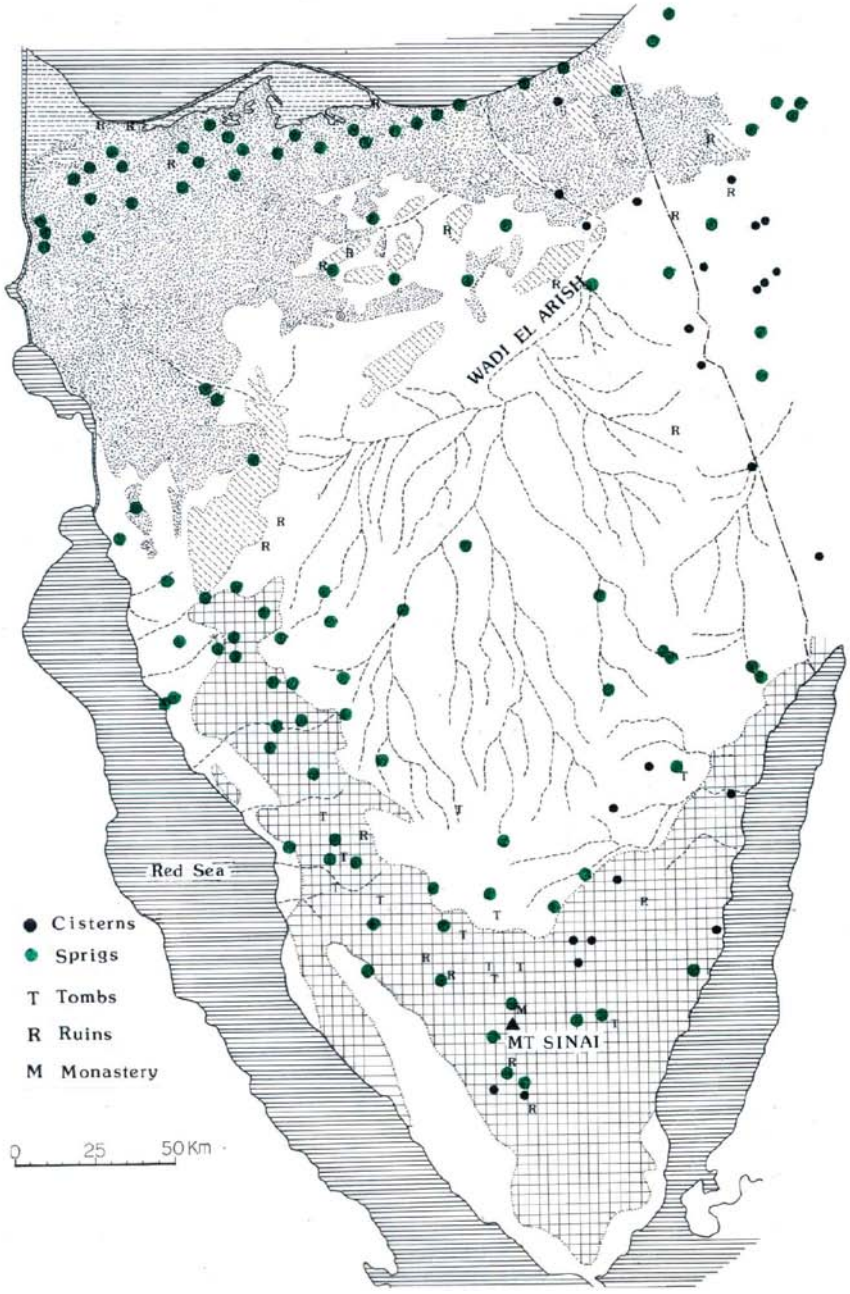

図 3　シナイ半島の地形概要と湧水，シスターン，廃墟の分布

(ONC H-5 を基に作成)

湧水は南部の山岳地帯と北部の海岸地域に集中しているのが注目される。

スエズ湾の東岸に沿った地域はシナイ半島を縁取るように南北に続く山岳地帯から流れ出すワジが多数存在し、それらの谷間にオアシスが点在する。例えば半島の南の端に近い街、A-Tur 近傍にある Hamam Saidna Musa （モーゼが水浴をしたところという意味）はこのような性格の湧水の中でも比較的規模の大きなものである。

スエズ湾地域に存在する油田の中でも最大のものといわれる Abu Rudeis から内陸に向かう道を辿るとシナイ山に続く Wadi Feiran に至る。このルートには多数の湧水が存在し、オアシスを維持させているが、中でも Gebel Muaghara というところにあるものは規模が大きい。このあたりはトルコ石やマンガンが産出されたので紀元前 3,000 年もの昔から開けていた。また隊商が行き交う場所でもあった。数多くの廃墟や現存する大小のシスターン（一種の溜池で土堰堤や岩を刳り貫いたものなど様々のものがある）はその当時の様子を物語っている。出エジプト記の 17 章にある“モーゼが岩を打たせて水を出した”ところもこのあたりだと言われている。世界遺産に登録されているセント・カテリーナ修道院もこの谷の奥にあり、またシナイ山への登山口もその先にある。（写真 2，図 4）

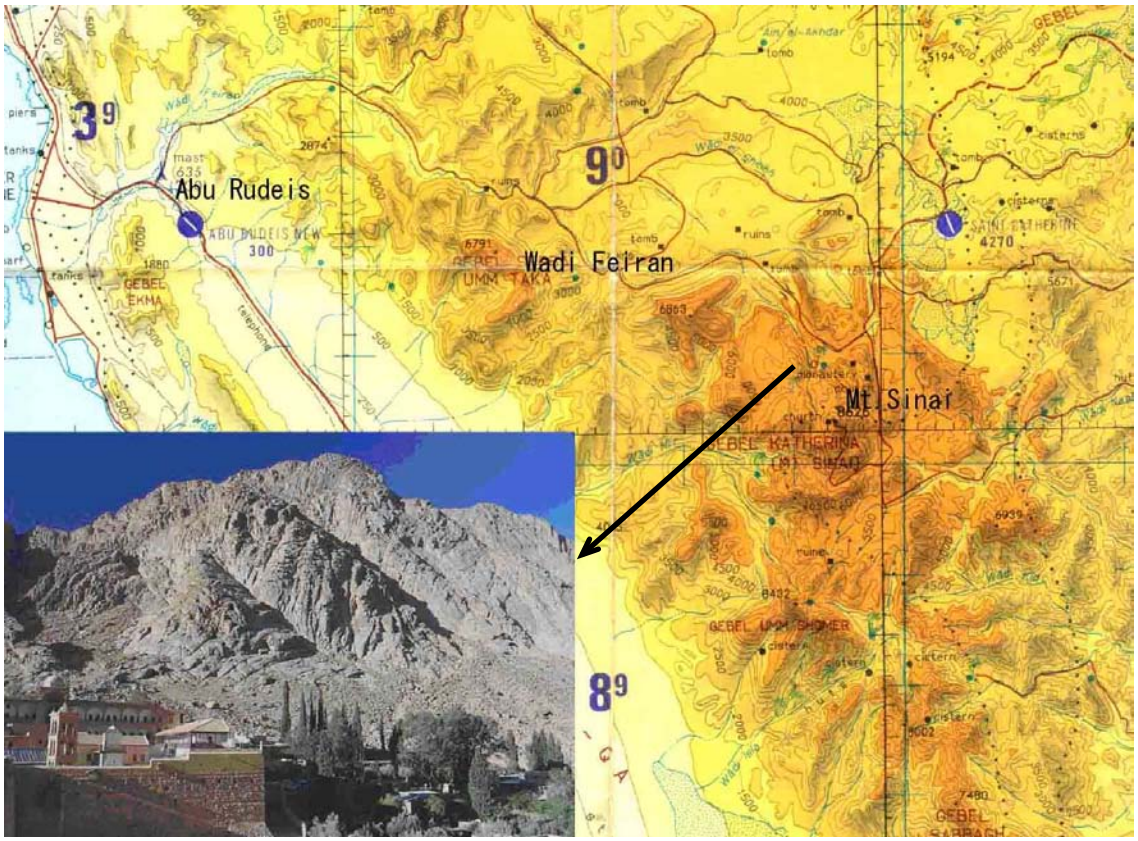

写真 2　セント・カテリーナ修道院　　図 4　ワジ・フェイラン

３．出エジプトのルート

モーゼに率いられたイスラエルの民がエジプトを脱出し、“神との約束の地、カナン”を目指した道のりは決して容易ではなかった。シナイの荒野をさまよった期間は実に40 年に及んだという。しかしモーゼはエジプトにいた若年の折、イスラエル人を虐待するエジプト人を殺害したために追放され、シナイ半島を 40 年間にわたって流浪していたとされており、この時代、ベトウィンとともに生活し、砂漠の地で多くの経験を積み、不毛の地で水を得る知恵も学んだ筈で、この長期間にわたる彷徨は長すぎるような気がする。これはモーゼが決して一枚岩ではないイスラエルの諸部族を統合し、鍛えるために意図的に行ったものと言えるかも知れない。だとすると 100 万を超える人間と同じ数以上の家畜のために安定して水が得られ、また土着の諸部族との衝突が避けられるコースを選ぶのが賢明である。

このように考えると古来より考えられてきた、北方ルート、中央ルート、南方ルートの３つのうち、南方ルートが最も有力と思われる。参考までに３つのコースの特徴をまとめてみると次のようになる。(図 5)

北ルート：このルートはカナンにいたる最短ルートであり、オアシスを連ねたようなもので水は得やすいがここを通過する際、土着の諸部族との衝突は避けられず、払わなければならない犠牲は大きい。

写真３　からからに乾いた死の大地

中ルート：Wadi El Arish bsin の中央部の一部を除いてからからに乾いた死の大地であり、このルートをとって移動する大集団の喉を潤すのは難しい。(写真3)

写真４　シナイ山

南ルート：図に見るように最長のルートである。しかし途中フェイランのオアシスなど、豊かな水が得られるうえ、外敵の攻撃を受けることも多くはない。これをもってすれば南ルートが有力な説になっているのが肯ける。このルートにはモーゼが神から十戒を授かったと言われているシナイ山が位置する。(写真 4)

４．聖書の中の水

出エジプト記の 15 章 22,23 節にある次の一文がまず興味を引く。

> モーゼはイスラエルの民を引き連れ、葦の海を越えて不毛の地に入った。しかし彼らは水を探し出すことが出来なかった。彼らが Marah に辿り着いたとき、そのあたりの水はあまりにも苦いため、飲むことが出来なかった。以来、その場所を Marah と呼ぶようになった。

Marah とは苦いという意味である。この場所は紅海の北東部に位置しており、スエズ湾からそう遠くないところにある（図 5)。聖書によると、エジプトを脱出したモーゼの一行は 3 日目にこの地に着いたが、それまでナイル川の水に慣れてきた人々はこの苦い水に不平を言い出した。ところがモーゼが神から与えられた杖をこれに投げ入れると水はたちまち甘くなったと記されている。

Uyun Musa （モーゼの泉）（写真 5）と呼ばれるこのオアシス地帯の湧水の中には石灰質または石膏質石灰華からできている高さ数 m の小さなマウンドから噴出しているものがあり、その水質はカルシウム、マグネシウム炭酸塩質、または硫酸塩質で、苦味の原因は硫酸マグネシウムである（Arie S. Issar,1990)。このような水質から見て地下水の涵養域は遠く、かつ滞留時間が長いものと考えられる。また豊富な湧水や湿地帯の存在からこの地域は広域地下水流動系の流出域に相当すると考えられる。

写真 5　Uyun Musa （モーゼの泉）

出典：Water Shall Flow from the Rock, Professor Dr Arie S. Issar, 1990 ）

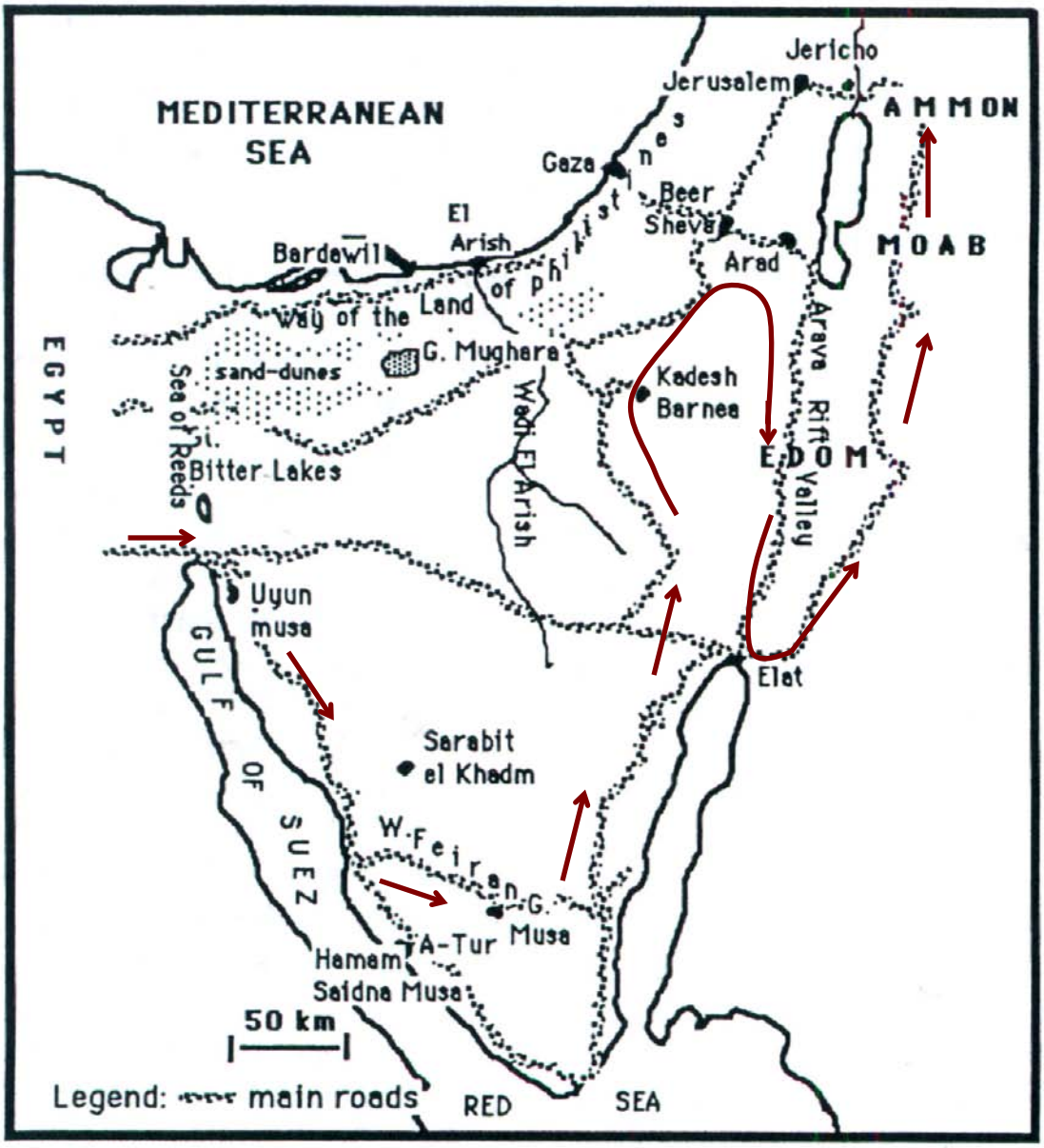

図５　シナイ半島を横切るルート

出典：Water Shall Flow from the Rock, Professor Dr Arie S. Issar, 1990 ）

（矢印は推定される出エジプトのルートで筆者が原図に加筆したもの）

Issar 氏はその著書（Water Shall Flow from the Rock）の中で、モーゼはこのような苦い水でもそれを飲み続けると、それに対する敏感性が低減し、また有害性も軽減されることを自らの経験から知っていたのではないかと述べている。

イスラエルの諸部族は Marah の湧水を離れてスエズ湾沿いに南下し、いくつかの水場でキャンプを張った後、Ras Abu Rudeis あたりから内陸部に続く圏谷状の谷、Wadi Feiran を通って Muaghara に着いた。その先には出エジプト記 17 章 1～7 節にある“神がモーゼをして岩から水を湧き出させた”というフェイランのオアシスがある。

このあたりの地質は上部にヌビア砂岩が分布し、そこに浅い地下水が存在する。またその下位には花崗岩、はんれい岩、ひん岩などの結晶質岩が基盤をなして分布していて、そこに裂罅水が存在する。Issar 氏によれば古代人はこのことをよく知っており、岩を穿って水を得ることは当時からすでに行われており、この技術は今日まで南部シナイ半島のベトウィンに継承されているという。聖書にある奇跡は特段のことではなかったということである。しかし水源を河川や運河から得ていたイスラエルの民にはこのことは神の仕業としか映らなかったのかもしれない。

シナイ山で神から十戒を授かったモーゼに率いられたイスラエル諸部族は 1 年間をシナイ山の麓で過ごしたのち、カナンを目指して出発し、その後シナイ半島北部にある Kadesh Barnea に集結した。ここには第三紀始新世の石灰岩から湧き出す Ein Qudeirat の大湧水など、大小の湧水が存在し、カナンを目指す部族の拠点としては絶好の場所だった訳である。

Kadesh から北上して直接カナンに攻め入ろうとしたイスラエル諸部族は、しかし Arad の王によって打ち負かされ、追い返されたため、再び流浪を余儀なくされることとなる。聖書によればその期間は実に 40 年間に達したという。Arad の手前から大きく迂回して今日の Negev 中央部に当たると考えられる Edom を通り抜け、途中抵抗に会いながらも Elat の北部を横切り、地方の部族との衝突を避けつつ Moab と Ammon の、より湿潤な高地に向けて進んだ。このあたりは年間降水量が 400mm から 700mm に達し（図 6）、また井戸の掘削技術を得たこともあって、リフトヴァレーを横切り、この Trans-Jordan 山脈に至った時点ではもはや水についての不満が出ることは無かったという。

民数記 21 章 17, 18 節にこうある。“井戸の水よ、湧きあがれ、人々よ、井戸に向かってうたえ。　司たちが笏と杖をもって掘り、民の長たちがそれに続いて深く掘った”と。

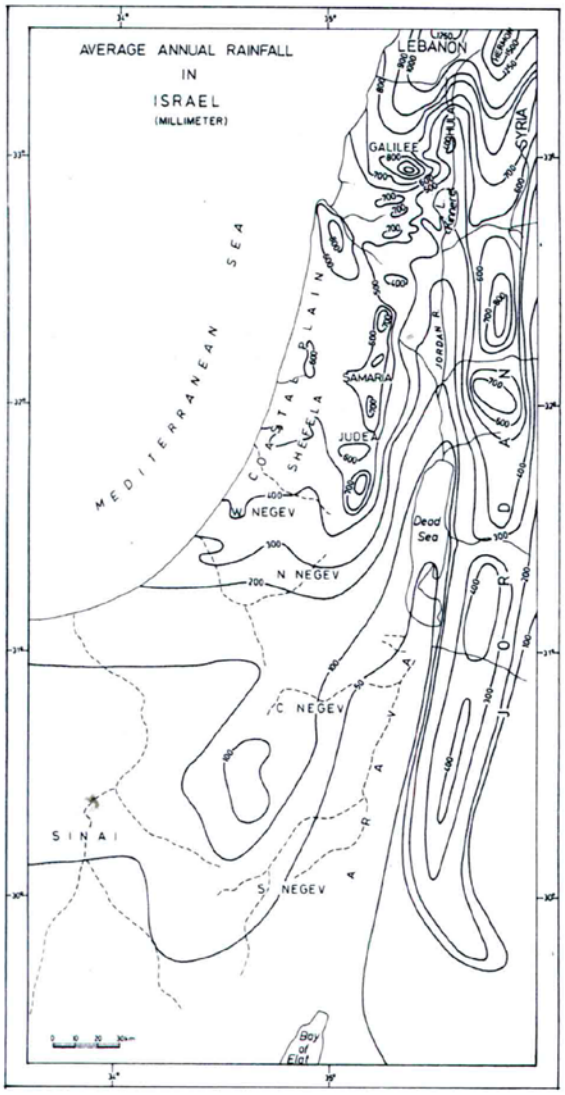

図 6　イスラエルの年間降水量

出典：The Quaternary of Israel, 1979)